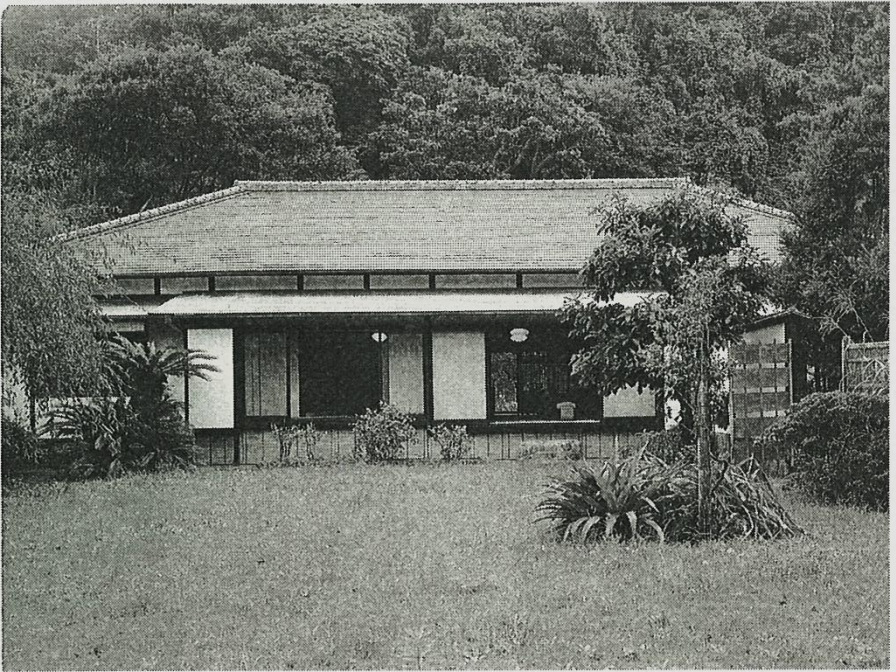

●社会教育施設●

鎌倉市吉屋信子記念館



鎌倉市教育委員会

はじめに

鎌倉市の社会教育施設である吉屋信子記念館は「自分の得たものは社会に還元し、住居は記念館のような形で残してほしい」という故吉屋信子さんの遺志により、土地・建物などが鎌倉市に寄贈されたものです。

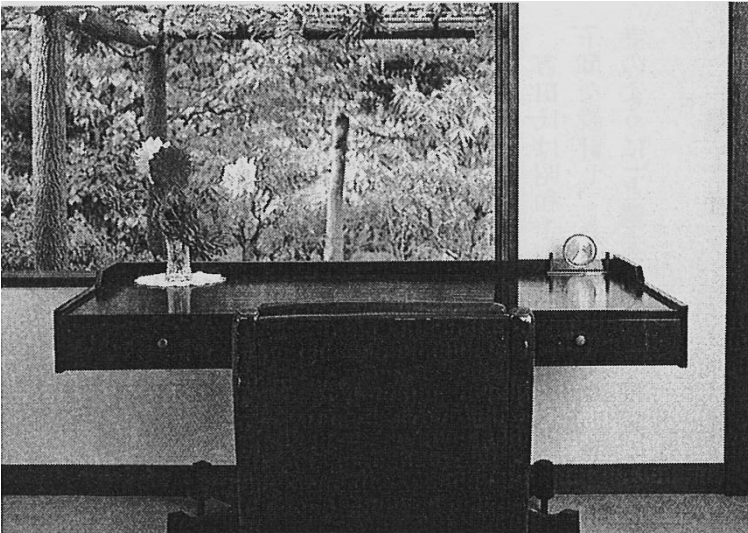
昭和四十九年に、市民の学習施設・吉屋信子記念館として開館して以来、多くの人々に親しまれ、利用されてきております。今後とも、より一層の利用をいただければと、この小冊子をつくりました。

平成十六年四月

鎌倉市教育委員会

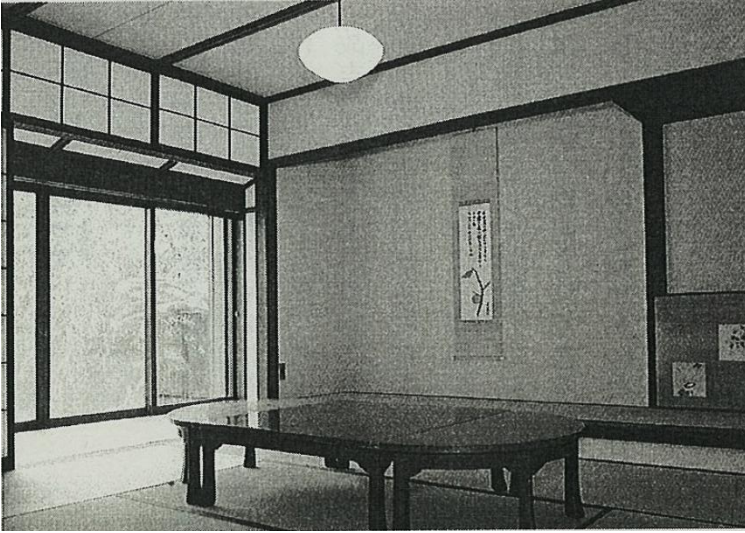
書齋

藤棚の見える北向きの大きな窓



和室

天井の作りが特徴



設計者

◆吉田五十八氏 近代数奇屋建築の第一人者

明治二十七年、東京に生れる。東京美術学校を卒業して渡欧。帰国後は特に数奇屋建築の近代化に努め、独自の手法によって、因習化した数奇屋建築を再生させた。第二次世界大戦後は、木造以外の大規模な建築にも、優れた作品を造りあげている。

小林古径、山口蓬春、梅原龍三郎らの邸宅のほか、大阪文楽座、明治座、日本芸術院会館などを手がけた。一方、教育にも携わって、東京芸術大学の教授となり、昭和二十七年に日本芸術院賞を、三十九年には文化勲章を受けた。四十九年、七十九歳で死去。吉田氏は昭和十年に、東京牛込砂土原町の吉屋信子邸を設計し、さらに三十七年、吉屋に「奈良の尼寺のように」と望まれて、この長谷の家を設計した。

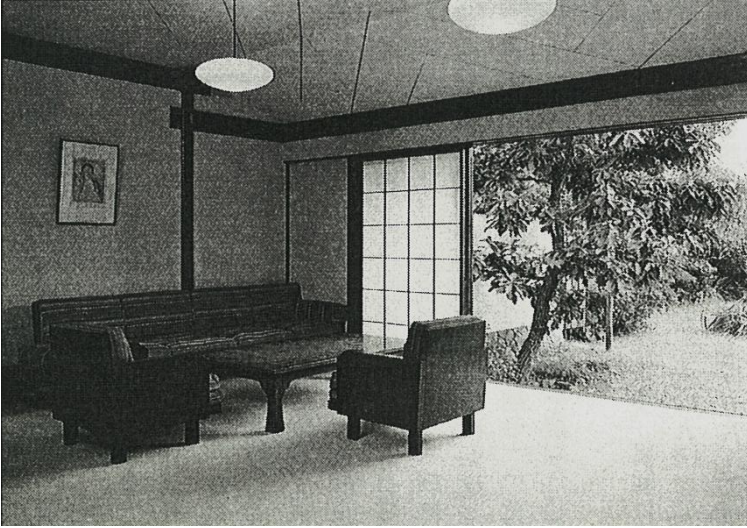
施工者

◆株式会社 水澤工務店

吉田五十八氏設計の建築物を多く手がけている。

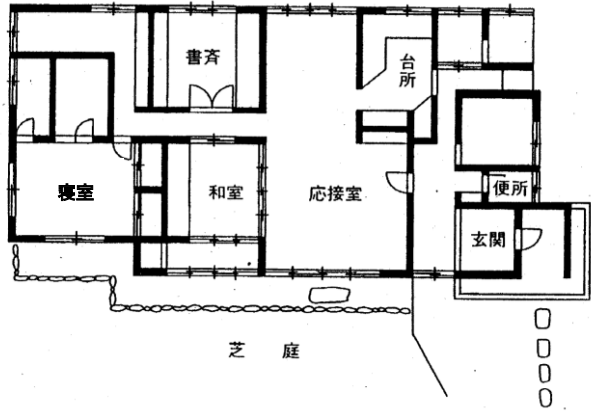
応接間

窓が広く、天井のデザインが特徴



寝室	書斎	和室	応接間	建物	土地
1	1	1	3	207	1877
9	4	3	9	7	7
2	8	2	9	7	2
9	8	4	4	2	1
m ²	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²

記念館平面図



吉屋信子 † 人と文学 †

◆芽生え・生い立ち◆

吉屋信子は、明治二十九年一月十二日、雄一、マサの長女として、新潟市の県庁官舎で生れた。四人の兄がいて、のち弟二人(うち一人は夭折)が生れる。官吏であった父の転勤によつて、佐渡、新発田で幼時を過し、三十四年、父が栃木県芳賀郡長となつたため、真岡へ移つた。三十五年、真岡尋常小学校に入学したが、父が下都賀郡長となつて栃木町に移り、二学期から栃木第二尋常小学校に転校した。四歳の頃から、巖谷小波の「浮かれ胡弓」(「世界お伽噺」中の一冊)など、片仮名の絵本を読みはじめ、読書好きの少女として成長している。

四十一年、栃木高等女学校に入学。講演に來た新渡戸稲造が「良妻賢母よりも一人の人間としての女性の完成」を説き、強い感銘を受けた。兄達の書棚にならぶ文学作品を読み耽り、友人に見せられた「文芸倶楽部」の鏡花作品に惹かれるなど、文学への憧れは次第に創作へと進んでいった。少女雑誌に短文

や詩を投稿し始め、自分の文章を活字で読むという楽しみを知る。

◆懸賞当選・「少女界」◆

四十三年、「少女界」の懸賞に応募した「鳴らざる太鼓」が一等に選ばれた。またこの頃「少女世界」から度々の当選によつて「梅檀賞」のメダルを貰っている。そのうちに少女雑誌では満足できなくなり、「文章世界」「新潮」などの文芸雑誌に投稿するようになった。

四十五年に女学校を卒業した信子は、文学への強い関心から進学を望んだが、厳格な父、昔かたぎの母に理解されることはなかった。大正二年、よき理解者であった



「鳴らざる太鼓」収録

三兄・忠明の勧めで一時、代用教員となつたが、文学への夢は捨てられず、数年



『花物語』 全3巻 實業之日本社 昭和14年
さし絵 中原淳一

の間投稿を続けながら鬱々とした生活を送っている。四年の夏、忠明(当時東京帝国大学在学中)をたよって上京、文学の勉強をはじめた。やがて、幼年雑誌の「良友」「幼年世界」に「文鳥と糸車」「幼い音楽師」

「赤い夢」などの
童話を、毎月の
ように寄稿して、
稿料を得るまで
に成長していく。

◆少女小説・

「花物語」◆

大正五年に
「少女画報」の
編集部に送った
「花物語」の第
一話「鈴蘭」が
採用され、掲載
されて好評を得
た。女学生の読

者の心を魅了した「花物語」は、それから十三年頃まで書き継がれて信子の代表作となり、少女小説という新しいジャンルを確立する。

六年、忠明の就職と共に一人になり、当初はバプテスト女子学寮から保母養成所に通い、女性の自由と独立をめぐる婦人問題に関心を深める日々を送っている。

この年十二月、それまで執筆した童話を集めて初めて単行本『赤い夢』を出版する。

◆新進作家・「地の果まで」◆

大正八年、「大阪朝日新聞」が募集した長篇懸賞小説を書くため、兄忠明の任地・北海道十勝に身を寄せた信子は、七月下旬に「地の果まで」を書き上げて、新聞社に送る。その直後、父危篤の知らせが届き、兄と共に宇都宮の実家に帰ったが、すでに昏睡状態にあった父は、翌日帰らぬ人となった。悲しみから逃れるためにペンをとり、二ヶ月かけて書き上げたのが「屋根裏の二處女」である。

十二月二十日、懸賞の応募作が一等に当選した報

せが届く。この成果は悲しみの中にいた信子に大きな喜びをもたらし、文学で生きる決意を固めさせた。

翌九年一月一日から「地の果まで」は「大阪朝日新聞」に連載され、続いて『屋根裏の二處女』が出版された。さらに「新潮」「文章世界」の創作欄に初めて執筆。この年が、信子の本格的な作家活動の出发点となる。

十年四月、北海道から東京本社に転勤し、大森西沼に居を構えた忠明に、母も共に迎えられ一緒に住み始める。

七月には、大阪と東京、両方の朝日新聞に「地の果まで」の続編にあたる「海の極みまで」を連載、翌年には映画化されるなど、急速に活躍の場が広がっていった。

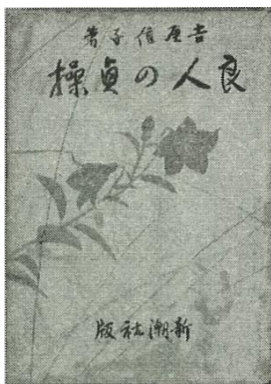
この頃刊行された作品には、『海の極みまで』『黄金の貝』『憧れ知る頃』『古き哀愁』『返らぬ日』『五つの花』『空の彼方へ』『櫻貝』など多数が挙げられる。

新進作家としてのめざましい活躍は、同時に交友関係にも広がりをもたらした。十二年一月には、新

聞記者の山高しげりに紹介され、教師をしていた門馬千代を知った。意気投合した二人は親しく交際をつづけ、のち十五年には信子が東京都豊多摩郡落合町の新居に移ったのを機に、共同生活をはじめている。(門馬千代はその後、信子の作家活動を支えつづけて、昭和三十二年に養女となり、六十三年八月に死去した)

◆家庭小説・「良人の貞操」◆

昭和二年四月から「主婦の友」に自分で持ち込んだ「空の彼方」が連載され、次第に婦人雑誌の司会や対談の依頼が来るようになった。また、婦人雑誌や少女雑誌への長編執筆が多くなるにつれて、純文学への志



『良人の貞操』
装丁・堂本印象

学への志向から次第にはなれ、通俗的な方向へと向かっていく。

改造社の「現代日本文学全集」から始まった円本ブームで、新潮社から出版された「現代長編小説全集」の一冊に、「吉屋信子集」（「地の果まで」「海の極みまで」収録）が収められ、多額の印税を入手した。この印税をもとに信子は、三年九月から門馬千代を伴って渡欧し、約一年滞在ののち、翌年九月に帰国する。帰国の船上で構想を練った「暴風雨の薔薇」を五年一月から「主婦の友」に連載して、好評を得る。以後、同誌をはじめ婦人雑誌の注文に追われることになった。

八年に「婦人倶楽部」に連載した「女の友情」は続編を執筆するほど評判がよく、引き続き各雑誌に「一つの貞操」「理想の良人」「男の償い」「女の階級」を連載。精力的に小説を書きつづけ、さらに円熟味を加えて、大衆小説家としての地位を確かなものにしていく。

十年には、それまでの作品を網羅した『吉屋信子全集』全十二巻が新潮社から刊行された。

十一年に「東京日日新聞」に執筆連載した「良人の貞操」は、大きな話題となり、その家庭小説はい

ずれも読者の喝采をあびて、吉屋信子の時代を築いた。

◆俳句・「秋灯机の上の幾山河」◆

日支事変の勃発によって現地取材の仕事が増え、やがて病をえて床につく。戦況は悪化をたどって仕事もなくなり、昭和十九年五月、休養をかねて鎌倉市長谷の大仏裏の別荘に疎開し、もっぱら読書と俳句を慰めとした。

俳句雑誌「鶴」に宗有為子の名で投稿、のちには高浜虚子の門に入って「ホトトギス」に投句している。よく出席した久米三汀（正雄）宅での句会が、この頃の信子の楽しみとなった。

後年、これらの句は『吉屋信子句集』（昭和四十九年、美術出版）にまとめられている。

◆短編・「鬼火」◆

昭和二十年三月十日、東京大空襲によって東京牛込砂土原町の留守宅が焼失し、八月十五日に終戦となる。翌二十一年になると、社会の復興が進み、新

興の雑誌があいついで発刊され、再び長編小説の執筆が始まった。

二十二年には「小説倶楽部」に掲載した「海潮音」によって、大衆文学懇話会賞を受賞した。

二十五年一月、充分に心を通わせ得なかった母マサが死去し、一年の間その悲しみは信子の胸から消えることがなかった。同じ年の十二月、信子は今後の仕事の質的向上を心に定め、東京千代田区二番町に新居を建て、東京へ戻る。

そんな中「安宅家の人々」などの長編を次々に発表する一方、短編小説にも取り組み、二十七年には短編小説「鬼火」で、女流文学者賞を受賞した。前年に「婦人公論」二月号に発表したもので、純文学



『安宅家の人々』
装丁挿画・伊勢正義

の圏外にいた信子にとって、素直に嬉しい受賞となった。二十七年に中央公論社

から刊行された小説集には、標題作の「鬼火」のほか「鶴」「冬雁」「生霊」など七編が収められ、吉屋文学の新たな境地が示されている。

◆伝記・「ある女人像」◆

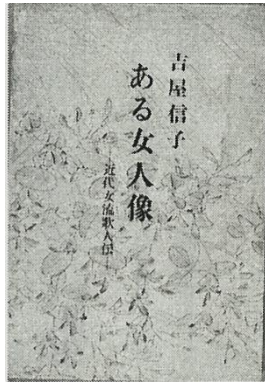
三十五年、長年胸中にあたため、折に触れて調べていたことを、「西太后の壺」などの作品に結実させ、調べて書くことに興味を持ち始めるきっかけとなった。

また、三十六年に菊池寛らの追想を依頼されたことに始まる随筆は、伝記的な意味合いを持つ「自伝的女流文壇史」「私を見た人」執筆へのきっかけとなった。

三十七年十月には、鎌倉市長谷に、数奇屋建築で著名な吉田五十八氏の設計による新居を建てて移っている。六十六歳であった。この頃親しい人々の死が相次ぎ、あらためて人生の終盤にさしかかったことを自覚する。閑静な環境の中で心ゆくばかり仕事に専念したい、という信子の心境は、晩年の吉屋文学を方向付けていった。

ある妃殿下を主人公にした「香取夫人の生涯」、山室軍平の遺族からの聞き取り、資料調査を徹底した「ときの声」を、「私の見なかった人」と題して杉田久女をかわきりに十人の俳人伝を書き、続いて山川登美子ら女流歌人伝の取材を重ねて執筆し「ある女人像」にまとめている。

この一連の伝記ものは、そのほとんどが三十七年



『ある女人像』
装丁・宇田荻邨

から四十年にかけて発表されていく。新しい分野の作品を手がけるうち、

次の新しいジャンルやテーマにぶつかるといふ相乗作用は、信子の創作の泉を枯らすことがなかった。

◆歴史小説・「徳川の夫人たち」◆

二十歳で発表した「花物語」から半世紀、七十歳をこえた信子は、あらたな分野への取り組みをはじめ

める。円熟の域に達してもなお衰えない創作意欲と、長年培ってきた古典の素養が、歴史小説に取り組み原動力となった。時代に翻弄されながら人生を全うした女性たちを、作品の主人公とする歴史小説の創作に、晩年を燃焼させることになる。

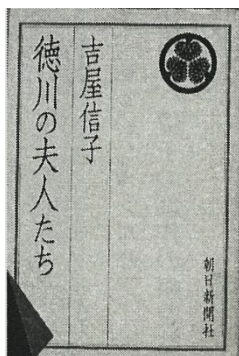
信子はこれまでの男性作家の歴史小説にたいして少なからず不満を感じていた。常に女性が彩りとしてのみ描かれていることが理由である。どの時代にも、すぐれた女性はいたはずであり、そのことが取り上げられないことがない。それならば自分の手で、歴史の彼方に埋没させられてしまった女性たちをよみがえらせたい、と考えたのである。

実現のきっかけとなったのが、「幕府祚胤伝」という史書の、家光の巻・永光院於万の略伝の一節であった。この三代將軍家光の愛妾於万の方の生き方に、強く心を惹かれ、構想が次第に形づくられていった。

四十年四月から於万の方を主人公にした歴史小説の準備にかかり、各種の資料調べに精力的に取り組み、執筆に没頭した。そして四十一年一月、「朝日新聞」に「徳川の夫人たち」の連載が開始された。は

じめて書いたこの歴史小説は、大成功を収めた。

引き続き四十二年三月、「朝日新聞」日曜版に「続



『徳川の夫人たち』
装丁・原 弘

徳川の夫人

たち」を連

載し、ます

ます歴史小

説にのめり

こんでいく。

この年十一

月、「半世紀にわたる読者と共に歩んで衰えざる文学活動」に対して、菊池寛賞を受賞した。

◆終焉・「女人平家」の完成◆

次の歴史小説「平家の娘たち」の資料集めや、構想づくりを行うのと並行して、徳川の夫人伝で触れられなかった「徳川秀忠の妻」を四十四年一月から「週刊読売」に執筆した。さらに、四十五年七月から「週刊朝日」に念願の「女人平家」の連載をはじめめる。

しかし、執筆中に身体の不調を覚え、その後は病

魔とたたかいたがながら作品を完成させている。次の作

品「太閤

北政所」

の構想づ

くりにも

精魂を傾

けたが、

病状は悪



『女人平家』
装丁・原 弘

化し、四十八年七月十一日ガンのため鎌倉の恵風

園病院で死去した。七十七歳であった。

鎌倉の高徳院(大仏)裏の墓地に葬られ、墓碑の左

手前に「秋灯机の上の幾山河」の句碑が立つ。法名

は紫雲院香誉信子大姉。

吉屋信子主要著作目録

赤い夢	大6	洛陽堂	嫉妬	昭29	講談社
屋根裏の二處女	大6	洛陽堂	片隅の人	昭32	新潮社
花物語一〜三	大9・10	洛陽堂	西太后の壺	昭33	東方社
地の果まで	大9	洛陽堂	香取夫人の生涯	昭36	文芸春秋新社
海の極みまで	大10	新潮社	自伝的女流文壇史	昭37	新潮社
空の彼方へ	昭3	新潮社	女の年輪	昭37	中央公論社
紅雀	昭8	実業之日本社	私の見た人	昭38	中央公論社
櫻貝	昭10	実業之日本社	底のぬけた柄杓	昭38	朝日新聞社
良人の貞操	昭12	新潮社	ときの声	昭39	新潮社
母の曲	昭12	新潮社	ある女人像	昭40	筑摩書房
女の教室	昭14	中央公論社	徳川の夫人たち 正、続	昭40	新潮社
乙女手帖	昭15	実業之日本社	徳川秀忠の妻	昭41	朝日新聞社
女の階級	昭23	隆文堂	私の見た美人たち	昭44	読売新聞社
黒薔薇	昭24	浮城書房	千鳥	昭44	読売新聞社
安宅家の人々	昭27	毎日新聞社	女人平家 前、後篇	昭45	読売新聞社
鬼火	昭27	中央公論社	吉屋信子句集	昭46	朝日新聞社
秘色	昭28	毎日新聞社	吉屋信子全集(全12卷)	昭49	東京美術
源氏物語 全三卷―わが父母の教え給いし―	昭28	毎日新聞社	吉屋信子少女小説全集(全18卷)	昭10・11	新潮社
				昭23・24	東和社

■案内地図 (JR 鎌倉駅より)

●記念館への道案内

鎌倉駅から京浜急行バス又は江ノ電バスにて

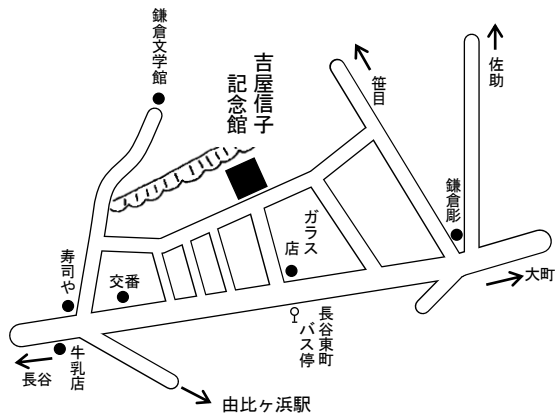
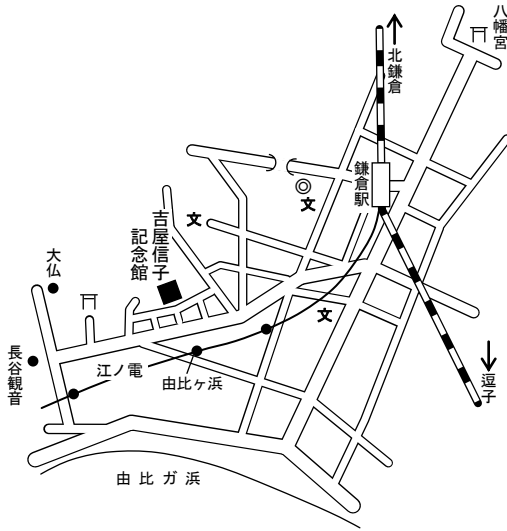
長谷東町下車徒歩2分

江ノ島電鉄 由比ヶ浜駅下車 徒歩7分

長谷一丁目3番6号

問い合わせ先：鎌倉生涯学習センター

電話：0467-25-2030



社会教育施設

鎌倉市吉屋信子記念館

平成二十七年八月修正

編集・発行 鎌倉市教育委員会